

(19)



JAPANESE PATENT OFFICE

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: **06087730 A**

(43) Date of publication of application: **29.03.94**

(51) Int. Cl.

A61K 7/48
A61K 7/00

(21) Application number: **04262979**

(22) Date of filing: **04.09.92**

(71) Applicant: **SHISEIDO CO LTD**

(72) Inventor: **HOSOKAWA KINYA**
NISHIYAMA SEJI

(54) **COSMETIC**

(57) Abstract:

PURPOSE: To obtain a cosmetic, having high emollient effects and excellent in usability.

CONSTITUTION: The cosmetic comprises one or two or more cholesterol derivatives and one or two or more esterified substances of polyhydric alcohols with fatty acids.

COPYRIGHT: (C)1994,JPO&Japio

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-87730

(43)公開日 平成6年(1994)3月29日

(51)Int.Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

A 6 1 K 7/48
7/00

9051-4C
G 9164-4C
C 9164-4C
W 9164-4C

審査請求 未請求 請求項の数1(全 8 頁)

(21)出願番号

特願平4-262979

(22)出願日

平成4年(1992)9月4日

(71)出願人 000001959

株式会社資生堂

東京都中央区銀座7丁目5番5号

(72)発明者 細川 欣哉

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株
式会社資生堂第1リサーチセンター内

(72)発明者 西山 聖二

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株
式会社資生堂第1リサーチセンター内

(54)【発明の名称】 化粧品

(57)【要約】

【目的】 エモリエント効果が高く、しかも使用性に優れる化粧料を提供することを目的とする。

【構成】 コレステロール誘導体の1種又は2種以上と、多価アルコールと脂肪酸のエステル化物の1種又は2種以上とを含有することを特徴とする。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 コレステロール誘導体の1種又は2種以上と、多価アルコールと脂肪酸のエステル化物の1種又は2種以上とを含有することを特徴とする化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、化粧料、さらに詳しくはエモリエント効果が高く、皮膚の乾燥を防ぎ、使用性に優れる化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】 皮膚は元来、体内からの水分の蒸発を適度に抑える機能を有しているが、極度に乾燥した環境に置かれたり、肌荒れ状態をおこすと、その機能は低下し、皮膚がざらざらした状態になる。このような場合、適当な油分を皮膚に与えることにより、しっとりした皮膚を回復し、水分の異常な蒸散を抑制することが知られている。中でもコレステロール類は高い抱水能を有しており、皮膚のなめらかさやしっとりさをより一層向上させることができる。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 しかしながら、コレステロール類は単独または非極性油とともに用いると、べたつき等の使用面で化粧料としての弊害を生じる。

【0004】

【課題を解決するための手段】 本発明者らは、このような事情に鑑み、エモリエント効果が高く、かつ使用面に優れた化粧料を得るべく鋭意研究を重ねた結果、コレステロール誘導体と多価アルコールの脂肪酸エステルを併用することにより、上記の問題を解決することを見だし、本発明を完成するに至った。すなわち、本発明は、コレステロール誘導体の1種又は2種以上と、多価アルコールと脂肪酸のエステル化物の1種又は2種以上とを含有することを特徴とする化粧料である。

【0005】 以下、本発明の構成について詳述する。本発明において用いられるコレステロール誘導体は、コレステロール、コレスタノール、デヒドロコレステロール、ラノリン脂肪酸コレステリル、イソステアリン酸コレステリル、12-ヒドロキシステアリン酸コレステリル、リシノール酸コレステリル、マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル等である。本発明において用いられるコレステロール誘導体の配合量は、化粧料全量中0.01～30重量%が好ましい。0.01重量%未満ではその効果は発揮されない傾向にあり、30重量%を超えると製品の工程上好ましくない。

【0006】 本発明において用いられる多価アルコールと脂肪酸のエステル化物としては、テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトール、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン等が挙げられる。本発明において用いられる多価アルコールと脂肪酸のエステル化物の配合量は、化粧料全量中0.01重量%以上が好ましい。0.01重

量%未満ではコレステロール誘導体のべたつきを抑えることができない。

【0007】 本発明の化粧料には、上記した必須成分の他に通常化粧料に配合される成分、たとえば、流動パラフィン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス、スクワラン、アーモンド油、オリーブ油、硬化油、ヒマシ油、モクロウ、ヤシ油、ミツロウ、ラノリン、カルナバロウ、パーム油等の油分、ラノリン酸、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、イソステアリン酸、オレイン酸等の脂肪酸、ラウリルアルコール、セタノール、ステアリルアルコール、オレイルアルコール等の高級アルコール、ミリスチン酸イソプロピル、ミリスチン酸ミリスチル、パルミチン酸イソプロピル等のエステル類、クエン酸、酒石酸、乳酸等の酸、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、トリエタノールアミン等のアルカリ、ラウリルジメチルアミノ酢酸ベタイン、モノステアリン酸グリセリン、ソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンアルキルエーテル等の界面活性剤、グリセリン、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール、ジプロピレングリコール、ソルビトール、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、ポリエチレングリコール、ヒアルロン酸等の保湿剤、酸化チタン、タルク、カオリン等の粉末、ヒドロキシメトキシベンゾフェノンまたはそのスルホン酸ナトリウム、パラジメチルアミノ安息香酸アミル、メトキシケイ皮酸オクチル、ジパラメトキシケイ皮酸モノ-2-エチルヘキサン酸グリセリル等の紫外線吸収剤、パラベン等の防腐殺菌剤、カルボキシメチルセルロース、アルギン酸ナトリウム、カルボキシメチルポリマー等の増粘剤、黄酸化鉄、チタンエロー、カーサミン等の着色料、グリチルリチン酸誘導体、グリチルレチン酸誘導体、サリチル酸誘導体、アラントイン、ユキノシタエキス等の消炎剤、グルタチオン、アルブチン、アスコルビン酸誘導体等の美白剤、プラセンタエキス、感光素、パントテニルアルコール、パントテニルエチルエーテル等の賦活剤、ニンジン、アロエ、ゼニアオイ、アイリス、ブドウ、ヨクイニン、メリッサ、セイヨウノコギリソウ、ヘチマ、ユリ、オオバク、シャクヤク、センブリ、パーチ、ビワ等の抽出物、レチノール、ニコチン酸アミド、トコフェロール等のビタミン類などを適宜配合することができる。

【0008】 本発明の化粧料の剤型は任意であり、溶液系、可溶化系、乳化系、粉末分散系、水-油二層系、水-油-粉末三層系等、どのような剤型でもよい。また、本発明の化粧料の用途も任意であり、乳液、クリーム、美容液、パック等のフェーシャル化粧料、ファンデーション、口紅、アイシャドー等のメーキャップ化粧料、ボディ用化粧料、芳香化粧料、洗浄料等に用いることができる。

【0009】

【実施例】 以下、実施例により本発明をさらに詳細に説

明する。本発明は、これら実施例に限定されるものではない。配合量は、すべて重量%である。なお、これに先立ち実施例で採用した試験法、評価法を説明する。

【0010】角層水分量（コンダクタンス値）測定

女性パネル25名の前腕内側部に10日間試料を朝晩適量を塗布し、皮表角層水分量測定装置（アイ・ビー・エス（株）MODEL:SKICON-200）に2mmφの中心電極を持つプローブを装着し、皮膚表面コンダクタンス値を指標として測定した。

【0011】女性パネルによる官能試験

化粧料としての使用性について、女性パネル25名による官能試験を行った。

べたつき感の評価基準

○・・・25名中20名以上がべたつかないと評価

△・・・25名中10名以上20名未満がべたつか

ないと評価

×・・・25名中10名未満がべたつかないと評価
しっとりさの評価基準

○・・・25名中20名以上がしっとりすると評価

△・・・25名中10名以上20名未満がしっとり
すると評価

×・・・25名中10名未満がしっとりすると評価

【0012】実施例1、比較例1、2

表1に示すクリームを製造し、上記基準に基づき評価した。なお、製法は、Aの油相部をBの水相部に加えて、乳化機で乳化してクリームを得た。結果も併せて表1に示す。

【0013】

【表1】

10

組成(重量%)	実施例1	比較例1	比較例2
セタノール	4.0	4.0	4.0
スクワラン	5.0	5.0	5.0
ワセリン	3.0	3.0	3.0
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	2.0	—	2.0
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	5.0	5.0	—
ポリオキシエチレンセチルエーテル	3.0	3.0	3.0
自己乳化型モノステアリン酸グリセリル	2.0	2.0	2.0
パラオキシ安息香酸エチル	0.2	0.2	0.2
グリセリン	5.0	5.0	5.0
1,3-ブチレングリコール	5.0	5.0	5.0
精製水	残余	残余	残余
コンダクタンス値	10	7	8
べたつき感	○	○	×
しっとりさ	○	×	○

【0014】表1より、本発明の実施例1は皮膚に潤い
を与え、しかも使用性に優れるものであることがわか

る。

【0015】

実施例2 化粧水

(重量%)

A. アルコール相

エタノール	5.0
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	2.0
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	0.02
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	0.03
パラオキシ安息香酸メチル	0.1
香料	適量

B. 水相

1,3-ブチレングリコール	5.0
グリセリン	5.0
アラントイン	0.3

7	8
セリン	0.5
乳酸	0.2
メタリン酸ナトリウム	0.05
着色料	適量
精製水	残余

製法

*水を得た。

Aのアルコール相をBの水相に添加し、可溶化して化粧* 【0016】

実施例3 美容液 (重量%)

A. 油相

コレステロール	0.5
テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトール	0.2

B. 水相

エタノール	5.0
グリチルリチン酸	0.1
ポリエチレングリコール 600	3.0
カルボキシビニルポリマー	0.2
グリセリン	10.0
アロエエキス	0.1
アルブチン	1.0
水酸化カリウム	0.1
パラオキシ安息香酸メチル	0.1
メタリン酸ナトリウム	0.05
精製水	残余

製法

※得た。

Aの油相をBの水相に添加後、乳化機で乳化し美容液を※ 【0017】

実施例4 乳液 (重量%)

A. 油相

セタノール	0.8
セトステアリアルアルコール	1.4
ラノリン脂肪酸コレステリル	2.0
テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトール	4.0
流動パラフィン	3.0
メトキシケイ皮酸オクチル	0.5
モノステアリン酸ソルビタン	0.5
自己乳化型モノステアリン酸グリセリル	1.0
ポリオキシプロピレンステアリアルエーテル	0.5
ステアリン酸	0.5
パラオキシ安息香酸エチル	0.2

B. 水相

グリセリン	3.0
ヒアルロン酸ナトリウム	0.1
カルボキシビニルポリマー	0.15
水酸化カリウム	0.15
エデト酸三ナトリウム	0.1
ニコチン酸アミド	0.1
牛脾臓エキス	0.1
香料	適量
精製水	残余

製法

せ、Aの油相部をBの水相部に加え、乳化機で乳化す

Aの油相部とBの水相部をそれぞれ70℃に加熱溶解さ 50 る。乳化物を熱交換機を用いて冷却し、乳液を得た。

【0018】

実施例5	クリーム	(重量%)
A. 油相		
スクワラン		8.0
ステアリン酸		3.0
ステアリルアルコール		3.0
自己乳化型モノステアリン酸グリセリル		6.0
ミツロウ		3.0
12-ヒドロキシステアリン酸グリセリル		3.0
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン		2.0
d1- α -トコフェロール		0.1
ヒドロキシメトキシベンゾフェノン		1.0
パラオキシ安息香酸ブチル		0.2
B. 水相		
プロピレングリコール		5.0
グリセリン		5.0
トリエタノールアミン		1.0
d1-ピロリドンカルボン酸ナトリウム液		1.0
卵殻膜ケラチン液		0.1
精製水		残余

製法

実施例4と同じ。

*【0019】

*

実施例6	サンケア	(重量%)
A. 油相		
メトキシケイ皮酸オクチル		5.0
テトラヒドロキシベンゾフェノン		2.0
ステアリン酸		4.0
セタノール		1.0
ステアリン酸イソセチル		1.0
ビバリン酸イソデシル		5.0
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル		4.0
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン		6.0
パラオキシ安息香酸ブチル		0.2
香料		適量
B. 水相		
グリセリン		5.0
カルボキシルビニルポリマー		0.1
トリエタノールアミン		0.1
精製水		残余

製法

実施例4と同じ。

40【0020】

実施例7	ファンデーション	(重量%)
A. 油相		
流動パラフィン		5.0
ミリスチン酸ミリスチル		2.0
ポリイソブテン		2.0
オレイルアルコール		2.0
ステアリルアルコール		2.0
オレイン酸ポリオキシエチレンソルビタン		0.5
パラオキシ安息香酸ブチル		0.1

11

12

テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトール	1.0
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	0.1
香料	適量
B. 粉末	
タルク	5.0
酸化チタン	5.0
酸化鉄	4.0
C. 水相	
ケイ酸アルミニウムマグネシウム	0.75
キサントガム	0.15
グリセリン	4.0
クエン酸	0.3
精製水	残余

製法

Aの油相部とCの水相部をそれぞれ70℃に加熱溶解

し、Aの油相部にBの水相部を加え、乳化機で乳化す *

*る。これを50℃まで冷却後、Bの粉末を加えよく攪拌し、ファンデーションを得た。

【0021】

実施例8 クレンジングローション (重量%)

A. 油相

ポリオキシエチレンオレイルエーテル	0.3
流動パラフィン	10.0
ミツロウ	2.0
パルミチン酸セチル	2.0
モノステアリン酸ソルビタン	2.0
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	4.0
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	0.1
香料	適量

B. 水相

オレイン酸ポリオキシエチレンソルビタン	4.0
パラオキシ安息香酸ブチル	0.2
精製水	残余

製法

Aの油相部とBの水相部をそれぞれ70℃に加熱溶解

し、Bの水相部にAの油相部を加え、乳化機で乳化す

る。乳化物を熱交換を用いて冷却し、クレンジングローションを得た。

【0022】

実施例9 口紅 (重量%)

A. 油相部

流動パラフィン	残部
グリセリルイソステアレート	1.0
ヒマシ油	40.0
カルナバロウ	2.0
固形パラフィン	7.0
キャンデリラロウ	0.5
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	0.1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	4.0
香料	適量
δ-トコフェロール	0.03

B. 粉末部

赤色202号	0.5
赤色204号	2.3
橙色201号	0.2
二酸化チタン	2.0

製法

Aの油相部を80℃で溶解し、Bの粉末部を加え、均一に分散する。混合物をロールミルで練り、容器に流し込み冷却して固め、口紅を得た。

【0023】

【発明の効果】 コレステロール誘導体および多価アルコールのエステル化物を含有させることにより、べたつきがなくエモリエント効果の高い化粧料が得られる。

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record**

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☐ **BLACK BORDERS**
- ☐ **IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- ☐ **FADED TEXT OR DRAWING**
- ☐ **BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- ☐ **SKEWED/SLANTED IMAGES**
- ☐ **COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- ☐ **GRAY SCALE DOCUMENTS**
- ☐ **LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- ☐ **REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- ☐ **OTHER:** _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.